

「南洲翁遺訓」について

第五話

第二十六条 自分に執着することへの戒め（克己心）

第二十九条 死生へのこだわりを超越した「道（正しく生きることが出来たか否か）」

西郷が斉彬に見出されたのは、農政に関して藩庁に提出した意見書を斉彬に認められた結果であり、やがて側に近く召しかかえられ、ほとんど師弟の如き関係になり、その薫陶（くんとう）を受ける事になった。

注）島津斉彬（なりあきら）

薩摩藩の第11代藩主。今和泉島津家出身で斉彬の養女・篤姫は江戸幕府第13代将軍・徳川家定の正室。薩摩藩より富国強兵や殖産興業に着手し国政改革にも貢献した幕末の名君である。西郷隆盛ら幕末に活躍する人材も育てた。



この幕末一の開明君主によって西郷は、藤田東湖（水戸）や橋本左内（越前）ら当時の日本の傑士（けっし）と言われる人物達と親しく「まじわる」機会を与えられ、大きく視野を広げ、大きな人物に成長していったとされている。西郷自身も、この有名な保守派や開国開明派の最高権威者「兩名」を先輩・同輩として敬服し、己を高め、特に同輩としての左内には城山で死ぬ時まで、彼の手紙を身から離さなかったという。

しかし決定的な影響を与え、西郷を西郷たらしめたのは斉彬の薫陶であろう。

それにあまり注目されてはいないが、西郷の敬天愛人の思想の基礎を若い時から持つに至る影響を与えた人物は、郡方書役助（こおりかたかきやくたすく）の職に在る時の上役であった迫田利斉（さこたとしなり）だと愚生は思っている。

迫田は清廉硬骨で農民思いの郡奉行であり、西郷の人生に強烈な影響を与えたのは確かであろう。ある年、凶作で農民の窮乏がひどいので、年貢減免を迫田は藩庁に願い出たが「ニベ」も無く断られた。憤慨した奉行は宿舎の壁に次の歌を残して辞職した人物である。その歌は「虫よ虫よ、五ふし草の根を絶つな。絶たばおのれも、ともに枯れなん」であった。現代語に訳すと「為政省たちよ、お前らは農民によって養われていることを忘れるな。農民が減れば、お前らも滅びるぞ」……である。多感な青年時代の西郷には、これも強い衝撃として深く心に残り、西郷の「敬天愛人」の思想形成に大きく響（きょう）することになった事であろう。

その後の西郷は日常に親しく農家を巡察したり、貧しい農民のため公私に渡り努めることが多々あったようだ。だが二十歳代の西郷も人間としてはまだ荒削りで血気と壮気に満ち、天地の間を縦横に駆け巡る如き気概を持っていたのであろう。別な意味で西郷に大きな影響を与えたであつたらう藩主斉興（なりおき）によって行われた「高崎崩れ」＝（お由羅騒動）での家臣の大粛清（高崎以下死罪13名・遠島50名）に対し、お由羅に天罰を下さんと、大山格之助（綱良）や有村治左衛門（桜田門外の変に参加、自刃〈じにん〉）らと奸女殺害の計画に熱中し、その軽拳を斉彬から叱られるなど、したこともある。この大粛清に対し、藩主となり藩政権を握った斉彬は、お由良派の誰一人に対しても復讐しなかった。斉彬の人物の大きさ、視野の広さが浮き彫りにされる。斉彬への忠誠心から熱血漢として熱に浮かされた若き頃の西郷の本性を見たような気もする。さて本筋に立ち戻ろう。

注) お由羅騒動

薩摩藩で起こったお家騒動。別名は高崎崩れ。第10代藩主・島津斉興の後継者として「側室の子・島津久光を藩主にしようとする一派」と「嫡子・島津斉彬の藩主襲封を願う家臣」の対立によって起こされた。事件の名前になったお由羅の方は、江戸の町娘（三田の八百屋、舟宿、大工など多数の説がある）から島津斉興の側室となった人物。

今迄の学びでは、時代の過渡期において、政治家や官僚が西洋の文明受け入れに混乱している状態であった。西郷は藩閥の利害に汲々としている明治政府に

対する批判や、西洋文明の危うさを説きながらも、刑法制等の西洋文明に対する一定の評価を下すなど、近代化への鋭い眼を持っていたことには驚かされる。このような西郷は、どの様な「人間観」をもっていたのか、又この人間観はどの様な思想・教養によって育てられたのか？西郷の思想史ともいえる南洲翁遺訓から探ってみたい。我々が最初にとっつきやすい人間観を示す文章から学んでみたい。即ち「自己愛の否定」である。

『第26条の原文は次の如くである』

「己を愛するは、善からぬことの第一也。修行の出来ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐（ほこ）り、驕謾（きょうまん）の生ずるも、皆自ら愛するが為なれば、決して己を愛せぬもの也。」

【訳】

自分を甘やかすことが、第一に善くないことだ。自分というものに“執着”するということだ。修行できぬのも、事業が成功しないのも、ちょっとした成功に驕（おご）り高ぶって傲慢（ごうまん）になってしまうのも、みんな自分に”執着“することから生じている故に己を愛することだけはしないことだ。」の意である。

原文では「己を愛する」である。“自分に執着する”と訳したのは、西郷は「愛という言葉は、善い意味でも、悪い意味でも使っているからである。『例えば、天を敬し、人を愛する』の愛は善い意味の愛であるが、ここでの“愛”は悪い意味の愛であるからだ。ちなみに“愛”という言葉は、儒教やキリスト教ではもっぱら善い意味で使われているが、仏教では、基本的には愛は「貪（むさぼ）り」とか「執着」などの意味で、否定すべき「煩惱」の一つである。若い頃、西郷は島津家の菩提寺である福昌寺の無参禅師に学んだ故、“愛”は悪い意味で使っている。

古川哲史は日本倫理思想史の権威であるが、彼も日本倫理の究極は「克己」以外の何ものでもなかった……と書いているように、日本人の道德心とか倫理観は、古代から現代まで「正しく生きる」ために一番大切だと考えてきたのは「克己」の一言に要約できると述べている。

注) 古川哲史

1912年鹿児島県国分市生まれ。和辻哲郎に師事。東京大学文学部名誉教授、国

際武道大学名誉教授、日本弘道会理事を務めた。2011年、老衰のため死去。99歳没。

「克己」とは「弱い自分に負けない」との意味だが、西郷の言ってることも同じことである。「楽をしたい」「面倒くさい」「謝りたくない」「褒められたい」…は、みな弱い自分であろう。それらに負けてしまうと「努力しない」「途中で投げ出す」「反省しない」「威張りたがる」という自分になってしまう。

人権尊重も男女同権も民主主義も結構であろうが、一番大切なことは「本当の自分を見失わぬ」ことと同時に「正しい行動をなし」「更には人の為、世の為にも誠をもって尽くすこと」であろう。「己に取込むのは『八分に止め、二分は天に預くべし』との古い諺（ことわざ）にあるが、今は己に取り込むに懸命で、生活も人生観も利己の一点張りの人が増加している。これが為に社会も無ければ国家も無い人々が政治家にもいる。凡そ人間のなすべき、尽くすべきことは、「何が得をするか、何が楽しいか、以上に何が正しいのか、何が尊いのか」である。人道や正義を重んじ、太平を開く為、社会への奉仕や国家への奉仕の為、己の利得や名誉を捨てた南洲の生き方に近づかんと学ぶのも人生の中では必要であろう。

西郷が前文より深い意味を示した主張が次の「遺訓」第29条である。「深い意味」との理由は、文中に「道」という言葉が頻出するからである。この言葉は江戸時代の知的教養の一つ“儒教”に関係する重要な概念だからだ。

『第二十九条の原文を示す』

「道を行ふ者は、固（もと）より困厄（こんやく）に逢うものなれば、如何なる艱難（かんなん）の地に立つとも、事の成否身の死生杯（など）に、少しも関係せぬものなり。事には上手下手有り、物には出来る人出来ざる人有るより、自然心を動（どう）す人も有れども、人は道を行ふものゆえ、道を踏むには上手下手も無く、出来ざる人も無し。故に只管（ひたす）ら道を行ひ道を楽しみ、若（も）し艱難に逢ふて、之を凌（しの）がんとならば、弥弥（いよいよ）道を行ひ道を楽しむ可（べ）し。予（よ）、壮年より艱難と云う艱難に罹（かか）りしゆゑ、今はどんな事に出合うとも、動揺は致すまじ、夫（そ）れだけは仕合（しあわ）せ也。」

【訳】

正しく道徳を守る人には、苦しいことがある。しかし苦しいからと言って、道を正しく歩むことを避けてはならない。道というものは、事の成否や身の生死に超越するものであり、道を行うに上手下手もない、どんなに苦しく辛い場面に直面しても、動揺しないことだ。命の生死のことや、事の正成失敗に心を取られろたえてはならない。その様な類の結果などある意味“どちらでもいいことなのだ”。それより大切なのは、それらの出来事に対して、己が正しく生きる姿勢を貫くことが出来たか否かというところにある。艱難や逆境は、人生には必ず直面するだろうが、これ等に打ち克つには、それこそ修養が必要なのだ。修養とは心を作る為の学問や禅行である。自分は二度も島流しに逢って艱難を極めたが、却って修養に努め、いやしくも道を踏み外すようなことはしなかった。だから自分は、どんなつらい事が起っても挫けるようなことはない。それだけは自分にとっては仕合せなことであった。

西郷は気力も体力も充実した三十代の半分以上を島流しの生活で過ごす苦難を体験する。この状況を克服できたのは、自らが“道”を行ったという自負心に支えられているからだろう。この克服の為の道の実行は「死生」への「こだわり」さえも越えたものだったのだろう。この死と生のこだわりを捨てる精神は自己愛の否定でもあるが、誰にでも簡単に実行できる行為ではない、この様な精神を西郷が自然の性格として備えていたとは考え難い、おそらく無参和尚という高德僧の知的教養即ち儒教思想や禅機を学ぶことによって、体得した人間観に違いない……と私は感じる。



無参和尚の指導で座禅を組んだと言われる石が鹿児島市城山町に保存されている。

「“学”は通（通）の為にあらざるなり。窮して困（なや）まず、憂いて意衰えざるが為なり、禍福終始を知って惑わざるがためなり」とある。つまり学問は物知りになることではない。また大学受験や就職の為ではない、逆境や艱難に出合った時に、これを乗り越えていく為に修養するのが学問である。……との無参和尚らからの教えが西郷の思想を育んだのであろう。

次に続く。

皇紀2679年（平成31年）3月10日

志雲会代表 有馬正能